



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「外国語（文学）」を読む女たち：可憐な生徒から宿命の女へ
Author(s)	平石, 典子
Citation	応用倫理, 10(Suppl), 6-13
Issue Date	2018-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/ouyourin.10.s.6
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72179
Type	departmental bulletin paper
File Information	hiraishi.pdf



「外国語（文学）」を読む女たち ——可憐な生徒から宿命の女へ

平石典子

（筑波大学大学院 人文社会科学研究科 准教授）

私は比較文学が専門で、著作の中で「煩悶青年と女学生」といった、教養をも含むことを研究してきました。今回こういうお話を頂き、とてもうれしく思います。実は私の両親は北海道出身で、父も母もまさにこの北海道大学で教養主義的な教育を受けました。その北海道大学で私が教養についての話をさせていただくということを、非常に感慨深く思いながら、本日は明治の話をさせていただきます。

1994年10月の『批評空間』という雑誌の共同討議の中で、柄谷行人がこんなことを言っています。

日本の近代文学は、二葉亭四迷でも山田美妙でも、だいたい『女学生』という存在にショックを受けたところから始まっています。異性が知的である、つまり、対自存在としてあるということへの困惑から始まっている。

ここで、「異性が」というのは「女性が」ということで、「女性が知的だということを日本の近代文学は発見した」と言っているわけです。今日のテーマでもある「教養」ということですが、広辞苑の第六版には英・仏語の culture、独語の Bildung のこと、とあって、「学問・芸術などにより人間性・知性を磨き高めること。その基礎となる文化的内容・知識・振舞い方などは時代や民族の文化理念の変遷に応じて異なる」と書いてあります。本日私が考えたいのは、明治の女性にとっての知性と教養とは何だったのか、そしてそれがどういうものを生んだのか、ということです。

まず、「明治女性の教養」の特徴的なところをとらえてみたいと思います。

このスライドにあるのは、18世紀のフランスの絵と、19世紀、江戸時代の歌川国芳の絵です¹。二つとも本を読む女性が描かれています。本を読む女性というのは18世紀のフランスにも、19世紀の江戸時代の日本にもいて、こういう図が描かれているわけです。では、彼女たちが「教養ある」



平石典子さん

1 （図1、次頁）ジャン・オノレ・フラゴナール「読書する娘」（1769）、（図2、次頁）歌川国芳「山海め伝度い図絵、津ゞきが見たい（志州西宮白魚）」（1852）



図1「読書する娘」

File:Jean-Honoré Fragonard 018.jpg

Licensed under public domain via wikimedia commons



図2「山海め伝度い図絵、津づきが見たい（志州西宮白魚）」

File:Kuniyoshi Utagawa, Women 12.jpg

Licensed under public domain via wikimedia commons

女性として描かれていたかということ、そうではありません。この絵の女性たちは、特に知性というものとは関係なく描かれています。女性が読んでいるのはどちらも小説だ、というところが重要です。女性は物語を読むことは許されていたわけですが、それは必ずしも「知的」と見なされることではなかった、ということを押さえておきたいと思います。そして、その状況が変わっていくのが明治時代であるということになります。

明治の女子教育は非常に早く始まりますが、そこには「洋学派」と言われる人たちの活躍がありました。開拓使次官であった黒田清隆等の功績が大きかったのですが、その中で、例えば、明治女学校の初代校長になる木村熊二はアメリカに留学したときに、「日本の女は無学にして、当地（アメリカ）の女と比べ候えば実に気の毒に存じ候」と書いています。「日本の女は無学」であって、だから女性に教育をしなければいけない、啓蒙しなければいけない、ということで、巖本善治は1885年に『女学雑誌』という、女性の啓蒙を目的とした雑誌を作ります。そして、その「発行の主旨」に、「希ふ所ハ欧米の女権と吾国従来の女徳とを合せて完全の模範を作り為さん」と書くのです。そして、その巖本善治が『女学雑誌』の中にフィクション（物語、小説）を書くわけですが、最初のころに発表された女学生が出てくる物語の中では、女学生たちは男性的な言葉を使っています。「田中君今日ハモーモーいやな算術で実に頭脳を労らしたよ」といった具合です。会計学みたいなことを勉強して疲れてしまった、ということなのですが、お互いに「きみ」と呼んだり、「〇〇君」と呼んだりしている。作者の巖本は、「本章は固と学校の女生徒中に行ハる、当世の風体を有の儘に写せし」と書き、実際にこんなふうな話を女学生たちがしていた、と記しています。

ここからわかることは、その初期においては女子の新教育というものが男性と同質のものであった、もしくは同質のものを目指した、ということです。明治の新教育はそのスタート時には、男性と同質の教育を女性にも施そうとしたのです。ところがこれは全くうまくいかず、多くの批判や非難にさらされることになります。

そうした状況が文学の中にどう出てくるかを見るために、二葉亭四迷の『浮雲』という作品を持ってきました。この作品に出てくるお勢というヒロインは、「生得て才澁の一徳」、生まれついて非常に才たけた女の子です。ところが「根生の軽躁者」とも「オチャッピー」とも書かれていて、「流行が大好き」という設定になっています。その中で主人公の文三がなぜお勢に魅かれるのか、その場面をみてみましょう。お勢は、彼との会話の中で「自分にも親より大切な者がいる」と言います。文三はもともとお勢のことが好きで、そういうことをちょっと話しかけるのですが、すると、お勢が「自分にも（大切なものが）ある」と言うのです。文三が「それはだれなのか」と聞くと、「人じゃアないの、アノ真理」と答えます。「真理」という言葉を聞いて、この女の子は何て高尚なことを考えているのだろう、と文三はすっかりお勢のことが気に入るわけです。

ではお勢がどのようにして「新知識」を得ていたか。これは、文三にとっては恋敵にもなる本田との会話の中で出てきます。

お勢さん位の年恰好でこんなに縹致がよくって見ると、学問や何かは其方退けで是非色狂いとか何とか碌な真似はしたがらぬものだけれども、お勢さんはさすがは叔母さんの仕込みだけ有って、縹致は好くっても品行は方正で、曾て浮気らしい真似をした事はなく、唯一心に勉強してお出でなさるから漢学は勿論出来るシ、英学も……今何を稽古してお出でなさる

そう聞かれたお勢が「『ナショナル』の『フォース』に列国史（スイントン）」と答えると、「フウ、『ナショナル』の『フォース』、『ナショナル』の『フォース』と言えば、なかなか難しい書物だ、男子でも読めない者は幾程も有る。それを芳紀も若くってかつ婦人の身でいながら稽古してお出でなさる、感心な者だ」と本田が言うのです。

ここで出てくる『ナショナル』の『フォース』と「スイントン」というのは、*National Fourth Reader*とウィリアム・スイントンの *Outlines of the World's History*（世界史概説）の二つです。まず、1863年に出た *National Fourth Reader* というのは、英語の勉強のために作られた教科書です。*Outlines of the World's History*（世界史概説）は中等教育を受けている男子が学ぶもので、それをお勢も勉強しているということになります。ここから分かるのは、「英語」という分野において、この時代には男性と同質の教育が女性にもなされようとしていたということです。

一方で、女学生が学ぶ「英語」は、当時の男女関係に別のもものもたらしました。その点について書かれた作品を挙げてみましょう。『浮雲』の次の年に出た、三宅花圃という女性作家の『藪の鶯』という作品です。坪内逍遙が、女学生を活写していると賞賛したこの作品に描かれているのは、『女学雑誌』の中にも登場した、「女権」と「女徳」のはざままで苦悩する女学生たちの姿でした。結局、この作品の中で勝利するのは女徳ということになります。「頑張って勉強する」と言っていた女学生たちは、師範学校には入るものの、「その将来は知るによしなし」と書かれるにとどまりますし、控えめな女学生、あるいは苦勞して弟を育てる女学生が、立派な人と結婚して幸せになった、というような結末が用意されるのです。

この作品の中で注目してみたいのが、「西洋かぶれ」と描かれる篠原浜子という女性です。この浜子が、恋人にだまされてしまって、最終的には敬虔なクリスチャンになる、というのが、物語

の一つのプロットになります。その第1回に、英語をめぐる話が登場します。

まず話題になるのは、「篠原さんのお兄さん」です。この人は浜子のいいなずけなのですが、留学していた「お兄さん」が帰ってくる、という話になります。浜子が「帰ってくると言っていたけれども、面倒くさくて嫌だ」と言うと、友人がこんなことを言います。

「オヤなぜでしょう。あなたおたのしみでしょうにねえ。そうして学校のお下読みや何かしておいただき遊ばすようござりましょう」

つまり、お兄さんが帰ってきたら勉強を見てもらえるじゃない？というわけです。ところが浜子は、「もう私は学校へ行きません」と言って、このように続けます。

「私くしは充分英学を勉強したい気ですから。このごろではあの御存じでしょう。山中というあの人は。学力もありますからたのんできてもらいます」

英学が好きな浜子は、英語を山中という官員に教えてもらう。そしてそのうちに恋仲になる——結局彼女はだまされているだけなのですが——ということがこの物語には描かれています。ここで出てくるのは、女性が英語を男性に教えてもらい、それが恋に発展する、という構造なのです。

もう一つ、「師弟関係が恋愛に発展する」ということがよく書かれているのが、森鷗外の『舞姫』という作品です。

余と相識る頃より、余が借しつる書を読みならひて、漸く趣味をも知り、言葉の訛をも正し、いくほどもなく余に寄するふみにも誤字少なくなりぬ。かゝれば余等二人の間には先づ師弟の交わりを生じたるなりき。

豊太郎は、「エリスとの交際は、もともとは師弟から始まったのだ」と語っています。ここで豊太郎が教えるドイツ語は、エリスにとっての外国語ではないわけですが、この物語が日本ではなくベルリンを舞台にしたものであって、エリスが例えば日本の芸者ではないこと、ふたりがドイツ語での学習を通じて恋を育んだということは、やはりこの時代には重要だったのではないかと思います。

このスライドは、ダンテの『神曲』の「地獄編」第五歌の、パオロとフランチェスカのエピソードを、19世紀の半ばにダンテ・ガブリエル・ロセッティが絵画にしたものです²。ここでは、ランスロットとグィネヴィアの物語を二人で読んでいたパオロとフランチェスカが、初めてキスを交わしています。そこから二人は今で言うところの「不倫の恋」に落ちていくわけですが、外国語の書物を通じたロマンティックな関係を、ダンテも描いていました。そうしたものが、明治の日本文学の中に描かれるようになったわけです。

2 (図3、次頁) ダンテ・ガブリエル・ロセッティ「パオロとフランチェスカ」(1855)



図3 「パオロとフランチェスカ」

File:Dante Gabriel Rossetti - Paolo and Francesca da Rimini(1862).jpg

Licensed under public domain via wikimedia commons

外国語を男性が女性に教える、そしてそこから恋愛関係が生まれる、という物語の発生は、「男女が同じものを学ぶ」という最初の女子教育とは違った形の安心感を社会に与えることになります。師弟関係の中では、女性も男性と「同等」にはなりえず、「恋愛の対象」になるだけだからです。こうした変化を受けて、明治30年ごろからは、新教育を受ける女学生たちが絵画の世界で美しく描かれるようになります。美しい女学生を描いた人と言えば、梶田半古が非常に有名です。この『魔風恋風』の挿絵³のように、当時の女学生は大抵洋風のものに彩られて描かれるわけですが、1906（明治39）年に『文藝倶楽部』という雑誌の口絵として描かれた「杜鵑一声」⁴においては、本を読んでいた女学生が、その本を伏せて、物思いにふけています。ここでも、女学生の知性あるいは教養というものが、男性にとって怖いものではなくなったことが見て取れるかと思います。

それでは、明治文学が描き出した「外国語を読む女」が皆こうした人物だったのかというと、そうではありません。実は男性作家たちはこの後、少し不思議な女性表象をしていくことになります。今度は、男性作家たちの文学的想像力が生み出した、違うタイプの「外国語を読む女たち」を見てみたいと思います。

一人目の作家は、泉鏡花です。泉鏡花は知識を鼻にかけた女性を嫌ったと言われていて、「女学生は大嫌いだ」と語った、というエピソードが残っています。彼が1904（明治37）年に『新小説』に発表した「紅雪録」と「続紅雪録」という作品では、女学校で教育を受けた女性が重要な役割を果たします。この女性はいわゆる「悪女」で、主人公である若者を誘惑して翻弄します。主人公の千之助が雪の中に放り出された後に、誘惑者である綾子はこんな風に描かれます。

長襦袢の肩微に円く、もつれ毛の濃い、雪のやうな頸脚を見せて、然もぬつくりとしたやうに裾を長く伸々と寝ながら、うしろから洋燈（ランプ）を受けて、宝玉入の指環の手に、一寸押へ、軽く斜にかざして、横文字の書を見て居た……

枕元にもコップがあったり、ベルモットの瓶があったりしますが、ここで綾子が見ているのは横文字の書、つまり外国語、あるいは外国文学です。このような、外国語の書物に彩られる女性

3 諸般の事情により画像は掲載できません。

4 諸般の事情により画像は掲載できません。

というものが、新たなる誘惑者として明治文学の中に出てきます。

泉鏡花は、新派劇として非常に有名になった『婦系図』の中でも、同じような女性を描き出しています。主人公の早瀬主税が静岡に行って知り合うことになる、河野の妹の菅子という人物がそうで、彼女も、女学校を出た、ある種の誘惑者として造形されています。菅子は「早瀬主税にドイツ語を習うのだ」といって、教本を買ってきます。ここでもやはり、外国語を習う、あるいは外国文学を読むことを通じて男女が仲よくなっていく姿が描かれるわけです。

さて、次に、夏目漱石と森鷗外の作品をご紹介しますと思います。

まず、夏目漱石の『虞美人草』という作品です。この作品のヒロインである藤尾はまさに、洋書と一緒に登場します。「静かなる昼を、静かに葉を抽いて、箔に重き一卷を、女は膝の上に読む」という場面で、彼女が読んでいるのはプルタルコス『英雄伝』の英訳です。そして、顔を上げた彼女は次のように描写されます。

蒼白き頬の締れるに、薄き化粧をほのかに浮かせるは、一重の底に、余れる何物かを蔵せるがごとく、蔵せるものを見極めんとあせる男はことごとく虜となる。

藤尾はここで、彼女が読む『英雄伝』に登場するクレオパトラになぞらえられることになります。クレオパトラは、この時代、「毒婦」という風にも表されていた女性です。藤尾はクレオパトラになぞらえられるだけではなくて、例えば小野との会話の中で「私は清姫のように追っ懸けますよ」と言ったり、「藤尾は丙午である」と地の文で書かれたりします。つまり彼女は、日本の伝統の中の「悪女」としても造形されていることになるわけですが、そこにクレオパトラが加わることで、西洋の「宿命の女」という女性像とも藤尾は重なっていくことになります。

「宿命の女」というのは19世紀のヨーロッパで流行した女性像で、主に性的魅力で男性をとりこにして、男性を破滅させてしまう女性です。歴史上の人物であるクレオパトラや、伝説中の人物であるサロメといった人たちも、19世紀ヨーロッパの文学的な想像力の中で「宿命の女」として読まれるようになっていきます。クレオパトラについては、テオフィル・ゴーティエが『クレオパトラの一夜』で、官能と残酷な冷徹さを兼ね備えた女王であるクレオパトラを描き出しており、漱石もこれを読んだのではないかと推察されます。『クレオパトラの一夜』の中のクレオパトラの描写と、「男を弄んで、一方で一毫も男から弄ばれることを許さぬ女」と描かれる藤尾の描写には非常に近いものがあります。「強い女性」が「外国語を読む女」として描かれるという、興味深い情景がここにはあるといえるでしょう。

もうひとつ、森鷗外の『青年』という作品をご紹介します。これは明治43（1910）年に書かれたものですが、作品中に坂井夫人という未亡人が出てきます。主人公の純一は、ジョン・ガブリエル・ボルクマンの演劇を観に行ったときに初めて坂井夫人に会って、このように言われます。

「あなたフランス語をなさるのなら、宅に書物が沢山ございますから、見にいらっしゃいまし。新しい物ばかり御覧になるのかも知れませんが、古い本にだって、宜しいものはございますでしょう。御遠慮はない内なのでございますの」

その後もう一度、坂井夫人のことを見た純一は、「坂井の奥さんの謎の目」を発見します。そして、次の章では「坂井夫人の謎の目」は「オオド（Aude）のようだ」と描かれます。「オオド」というのは、ベルギーの作家のカミーユ・ルモニエが1897年に書いた『恋する男』に出てくるヒロインです。官能的な女性であるマオード（オード）は、「インドのヒンドゥー教の踊り子たちの技巧がある」と形容されます。これは、やはりベルギーの世紀末作家、ユイスマンスが1884年に発表した『さかしま』という作品の中で、ギュスターヴ・モローの『ヘロデ王の前で踊るサロメ』の絵から連想するサロメ像にも共通する、異国趣味をかき立てる女性像です。エクゾティシズム（異国趣味）、というのが、当時のヨーロッパでの「宿命の女」表象の一つの特徴だったわけです。

では日本の場合、どうだったかということを考えると、『青年』の坂井夫人もそうですし、『虞美人草』の藤尾もそうなのですけれども、異国趣味をかき立てる存在であることは同じです。ただし、異国趣味の「異国」というのがヨーロッパから見た異国とは違って、日本から見たヨーロッパ、あるいは北アメリカということになります。そして、そこに所属する人たちが話している言葉——英語やフランス語——は、当時の日本から見たときに、「より強い文化が持っている言葉」ということになるわけです。そのような言語の力関係、当時の文化の力関係が、男女関係に反映されているのが、このような明治文学ということになります。「外国語を読む女」、「外国文学を読む女」は、もともとは男性から外国語を教えてもらい、恋愛や結婚の対象となる女性でした。それが男性作家の文学的想像力の中で、少し違う方向に行ってしまったのが、明治30年代の終わりから40年代の始めだったことがわかります。

最後に検討したいのは、このような女性表象を女性たちがどのように受け止めたのか、ということです。実際に外国語や外国文学を読んだ女性の反応を、一つだけご紹介しておきたいと思います。

今回ご紹介したいのは、大塚楠緒子という作家です。この人は裁判官である大塚正男の長女として生まれて、幼いころから和歌を学び、東京女子師範附属女学校を主席で卒業しました。そして、小屋保治という美学者と結婚した後、自分も文学を書くようになります。漱石にも文学を習ったりしていて、漱石との関係で語られることも多い女性作家です。彼女が1906年に『晴小袖』という非常にきれいな本を出すのですけれども、この本には、夫が美学者だったということもあって、西洋絵画がたくさん収められていました。彼女はメーテルリンクの翻訳もしています。誰かに手伝ってもらった可能性もありますが、日本で初めてのメーテルリンク作品の翻訳は、大塚楠緒子の名前で出ています。

実際に外国語、外国文学を読んでいたこのような女性は、自分の作品の中でどんなことを書くのでしょうか。『晴小袖』の次の年に出た『露』という作品で描かれているのは、高等教育を受けた女性の夢と挫折です。夢と挫折ということでは、三宅花圃の『藪の鶯』とも近いわけですが、この小説で面白いのは、その中に、当時の男性たちが描き出した女性表象への、批判めいたものが出てくるところです。例えばクレオパトラについては、主人公の一人の少女がもう一人に向かって「田住さんは実に美人だわ、貴女は、そら、何時か西洋の雑誌に有つたクレオパトラの絵ね、あの顔に似ていらつしゃるわ」と言うと、言われた方は「厭よ、島川さん、クレオパトラだなんて、妖婦（コケツト）じゃありませんか、似て居るなんて酷いわ」と返します。

あるいは、「文学と女性」という講演でサッフォーについて語りに来た、神坂博士のことを話す場面では、彼女たちはより辛辣です。二人は彼のことを理想の人と思っていたわけですが、どうもそうではないらしい、ということが分かります。なぜかというと、「あの人は海外へ行って、四歳に成る女の児の有るのも構はず、置いてきぼりに為て、情婦には沙汰なしで、日本へ逃げて帰つて来た」ということを知るからです。

これは実は、女性が読む『舞姫』と『虞美人草』ではないかとも思われます。『虞美人草』の藤尾は、クレオパトラと評されたわけですが、「クレオパトラは男性を誘惑する妖婦（コケツト）ではないか」と言って、自分と重ねられることを拒否する。「四歳に成る女の児の有るのも構わず……逃げ帰つて来た」男性知識人については、二人の少女は、「男といふものは、何故、此様に信用が置けないのでせう」、「口に聖賢を説いて、行は魔道を荒む学者」だと痛烈に批判します。これは、『舞姫』の豊太郎批判とも考えることができるのではないかと思います。男性が文学作品の中で書いた女性像というものは、あくまでもファンタジーの中のことで、実際の女性たちには必ずしも影響しなかったのかもしれませんが、しかし、大塚楠緒子を書いたような作品が、1911年に発刊される女性による女性のための文学雑誌、『青鞥』に勇気を与えるようなものだったとも考えることができるのではないかと思います。

駆け足で見てまいりましたが、明治の教養ということを考えたとき、そこには「新しい女性」の教養としての外国語と外国文学がありました。ただし、「男性と同質なもの」と言いながら、男性と同じことをやろうとすると批判される。そこでどうなったかということ、男性から教授を受けてそこに恋愛が発生する、ということで正当化される女性の教養というものがあつたことがわかります。

一方で、当時の日本からしてみれば、教えられる外国語は「強者」の言語であり、西ヨーロッパや北アメリカで話されていたものです。そういう欧州言語を話す女性、読む女性が今度は、「悪女」や「宿命の女」といった、「強い女性」表象につながることになります。これはあくまでも、ファンタジーの世界において、ということでしたが、そのファンタジーを受けて、外国語を読む女性、外国文学を読む女性が発信していくことになったわけです。そういう意味では、ファンタジーは何らかの力を女性たちにも与えたのかもしれませんが。

その後どうなるのかということについては、この後続く、高田先生、小平先生のお話を楽しみにしたいと思います。（拍手）

蔵田：ありがとうございました。後のお二人に続くようなお話であつたと思います。

それでは、次に高田里恵子先生から、「学校の勉強なんかしない——男の特権？」というタイトルでお話いただきます。